

「クリスマス・キャロル」について 「無知」と「欠乏」

早尾葉子

ディケンズの愛読者である私は、最近の読者層が気になって、年度初めに「ディケンズの作品を日本語でも、ダイジェスト版でも良いから、読んだことのある人は？」と学生達に聞いてみる。「大いなる遺産」とか「オリバー・トウィスト」などの比較の人気のある作品の名を期待して聞くのだが、返ってくるのは、一、二の学生の「クリスマス・キャロル」という返事である。他はディケンズなど読んだこともない、とのことだ。それが毎年のように続くと、改めて「キャロル」を読み返してみようという気になった。

この作品はディケンズの他の作品と比べると大変短かい。長編小説の10分の1位の長さといってよいだろう。また、子供向きの童話として読まれることがあるくらい、プロットも明快で理解しやすい。一連のクリスマス物といわれる作品群の一番初めに書かれた物語で、炉辺で家族が団欒している時に、一人が読み皆が耳を傾けるにはぴったりのものだ。ディケンズ自身はこの物語を「はしがき」で *Ghostly little book* と呼んでいるし、またタイトルの正式名は *A Christmas Carol in Prose being a Ghost Story of Christmas* である。幽霊話であるからには、読者をこわがらせ、どきどきさせ、最後には現実に戻ってほっとさせるものだろう。ただし、ここでいう幽霊と、私達の考える幽霊とはいささか違うようだ。例えば「四谷怪談」のお岩や、「番町皿屋敷」のお菊のように殺された者の怨念が形となって現れたものではなくて、主人公スクルージを善に導く、この世のものではない存在として登場している。クリスマスのこの時に神から遣わされた使者ともいえよう。

ディケンズの小説は数多く映画化されているが、1988年から1989年にかけての冬に、「クリスマス・キャロル」が舞台を現代にかえて「三人のゴースト」という邦題で上映されていた。私は観られなかったが、140年以上も前の物語の映画化が現代にも受け入れられていることに一種の感概を持ったものだ。

この物語は1843年12月に、その年のクリスマスに向けて出版された。ディケンズが31歳の時で、以後、毎年のようにクリスマスのための物語が発表された。「マーティン・チャズルウィット」が1843年11月から翌年7月にかけて発表されているので、それと平行して書かれたもので、いつものように月刊分冊形式で発表されたのではなく、単行本として発表された。1843年は、日本でいえば天保14年にあたり、その2年前に滝沢馬琴が「南総里見八犬伝」を発表している。一茶、良寛などもこの時代の人である。何故この様なことを気にするかというと、「キャロル」第一節で、ディケンズは主人公スクルージについて、このように言っているからだ。

Even the blindmen's dogs appeared to know him; and when they saw him coming on, would tug their owners into doorways and up courts; and then they would wag their tails as though they said, "no eye at all is better than an evil eye; dark master!"^①

このような時代にイギリスにはすでに盲導犬がいたとは、と驚いたので、日本を少し振り返ってみたのだ。

話をもとに戻そう。この物語のあら筋はいたって明快である。主人公はロンドンで商売を営む孤独な老人で、自分は独力で今日の地位を築いたのだから、貧しい人に情をかけたなり、慈善のために金を使うなどは真っ平だというけちん坊だ。貧しい人々は努力が足りないのだ、という厳しい考えの持ち主で、人間ばかりか、それこそ盲導犬でさえも顔を合せたくないという類の男だった。

さて、ある年のクリスマス・イヴのこと、クリスマスを祝う食事に招待しにやって来た甥のフレッドに門前払いをくわせ、貧民救済のための募金を求めに来た世話人達も例の持論で追い返した後、帰宅してからたった一人で自室に座っていると、かつて共同で事業をしていて、7年前に死んでしまったマーレイの幽霊が現れる。マーレイはスクルージ同様に、他人のことなどに心を動かされたりせぬ、冷酷で、かたくなで、けちな男だった。そのマーレイがスクルージに向って、自分の死後の苦しみについて語る。自分は生前の利己主義のおかげで、死んでからも救われない。だから、せめてお前だけは今のうちに悔い改めて、人間らしい心を持ってくれ、と警告しに来たのである。これから三人の幽霊が次々にスクルージのもとに訪れる。それらを受け入れることにより、スクルージが自分のようにならないですむ機会が与えられ、望みが出てくるというのだ。スクルージは恐怖に震えながら床に着く。やがて三人の幽霊がマーレイの言葉通りに次々にやってきて、様々な情景を見せてくれる。過去のクリスマスの幽霊はスクルージがまだ幼かった頃、貧しかったがいかに純真で明朗で、金欲に毒されていないかかったかを思い出させる。現在のクリスマスの幽霊は、スクルージの事務所で安月給で酷使されているボブ・クラチットの貧しいけれど暖かい家庭、足の不自由な、やがては死ぬであろう末っ子ティムの状況を示す。さらに未来のクリスマスの幽霊は、スクルージが死んでも誰一人として悲しむ者もなく、死体が着ていたシャツさえも盗まれて売り飛ばされる悲惨な姿を指示す。

クリスマスの朝、目覚めたスクルージは、その日から親切で陽気で気前の良い善人になり、人々から好かれるようになった。以上が物語の大まかな要約である。簡単に言えば、再生の物語であり悪人がクリスマスに善人として生れかわるという内容で、このハッピー・エンドは前半のスクルージの性格が酷薄に描かれていても、読者を大いにほっとさせたことだろう。この結末と、スクルージの幼い頃、若い頃の、クリスマス

に何の疑いも持たずにそれと一体化している描写、甥の家でのパーティーの躍り上がるような喜びの描写から、この物語は暗い側面を持ちながらも輝くばかりの人間肯定の印象を与える。

この作品は読者に心から迎えられた。「マーティン・チャズルウィット」が必ずしも大人気とならず、その売れ行き不振を補おうという動機もあって書かれた作品だけに、作者にとって大きな慰めとなった。ジョン・フォスターは、次のように執筆の動機と進行状況を述べている。

It (*Christmas Carol*) was the work of such odd moments of leisure as were left him out of the time taken up by two members of his *Chuzzlewit*; and though begun with but the special design of adding something to the *Chuzzlewit* balance, I can testify to the accuracy of his own account of what befell him in its composition, with what a strong mastery it seized him for itself, how he wept over it, and laughed, and wept again, and excited himself to an extraordinary degree, and how he walked thinking of it fifteen and twenty miles about the black streets of London, many and many a night after all sober folks had gone to bed.^②

作者自身が書きながら興奮している様子がよくわかる。彼が一番初めの読者で、最も熱心な読者だったのだ。「チャールズ・ディケンズの生涯」によれば、当時のディケンズは人気作家であったにもかかわらず、「チャズルウィット」の売れ行きの悪さのために苦境に立っていた。チャップマン・アンド・ホール社との間で出版契約の問題がこじれていたし、養うべき家族は多く、講演の依頼には応じなければならぬ等々、雑事にとり囲まれていた。経済的にも by which time the debt will have been materially reduced…と述べているように大変苦しかった。そこへきての「キャロル」の大成功はディケンズを喜ばせたが、経済的には落胆させた。売り値に見合わぬ経費のかかった本を作ってしまったため、利益は思ったほどではなかったのである。

しかしながら、この物語に対する賛辞は惜しみなく作者に注がれた。判事であり、批評家であり、またディケンズの友人でもあるフランシス・ジェフリーは1843年12月26日にディケンズに書いた手紙の中で次のように言っている。

…We are all charmed with your *Carol*, chiefly, I think, for the genuine *goodness* which breathes all through it, and is the true inspring angel by which its genius has been awakened. The whole scene of the Cratchetts is like the dream of a beneficent angel in spite of its broad reality, and little *Tiny Tim*, in life and death almost as sweet and as touching as Nelly, ……Well, you should be happy yourself, for you may be sure you have done more good, and not only fastened more kindly feelings, but prompted more positive acts of beneficence, by this little publication, than can be traced to all the pulpits and confessionals in Christendom, since Christmas 1842. ……^⑧

また、W・M・サッカレーは1844年2月、*Fraser's Magazine* に載せた書評の中で、「キャロル」には文学的には欠点もある、としたうえで、次のように書いている。

…Who can listen to objections regarding such a book as this? It seems to me a national benefit, and to every man or weman who read it a personal kindness. ……^⑨

これらの著名人ばかりではない。一般の読者の反響もすばらしいものだった。再びフォースターから引用しよう。

There poured upon its author daily, all through that Christmas time, letters from complete strangers to him which I remember reading with a wonder of pleasure; not literary at all, but of the simplest domestic kind of which the general burden was to tell him, amid many confidences, about their homes, how the *Carol* had come to be read aloud there, and was

to be kept upon a little shelf by itself, and was to do them no end of good.

◎

同時代の人々の心をこれほどまでにつかみ得たのは、ディケンズの描いたクリスマスの精神が読者の共感を得たからに他ならない。ジェフリーやカーライルが指摘しているように、Tiny Tim やスクルージの少年時代が読者に与えた印象も大きかった。貧しく苦しい状況のもとで、けなげに生きる少年達はセンチメンタルではあるが、読者の共感と涙を誘った。読者が心の奥底に持っている願望を平明に具体的に描いているので読者の情感に訴えたのだろう。この時にこそ人々は貧しい者、苦しんでいる者に寛容な心で光を投げかけ、慰めを与え、互いに感謝の気持ちで過したいと願っている。クリスマスは現実はさておいて、歓喜の時であり、「キャロル」はそれを全面的に肯定している物語なのだ。しかし、注がれる光が眩しければ眩しいほど、その作る影は深くなる。むしろ、その影の深さが輝きをより際立たせるものだ。この作品にも人々が目をそらしている現実の醜さ、悲惨さも織り込まれている。

A Christmas Tree という小編で、ディケンズは幼い頃のクリスマスについて書いている[◎]。わくわくするようなお祭り騒ぎ、にぎやかで楽しいクリスマス。子供であればすっかり興奮して、頬をまっ赤にし、目をきらきらさせているであろう時に見た仮面を、ディケンズは恐れ、夢の中でうなされたのだ。仮面の無表情に、その場にそぐわぬ何かを嗅ぎつけたのかもしれない。これが光を作る影の部分なのだろうか。他の長編小説には及ばないが、この作品にも明と暗の世界があり、その事が「キャロル」を単なるおとぎ話以上のものにしてている。

クリスマスの意義をディケンズは作中で、甥のフレッドにこう言わせている。

a kind, forgiving, charitable, pleasant time: the only time I know of, in the long calendar of the year, when men and women seem by one consent

to open their shut-up hearts freely, and to think of people below them as if they really were fellow-passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys.^⑩

どんな人でも心を開き、他の人々を受け入れる季節。もちろんスクルージは、その様な言葉に心を動かされるような人間ではない。彼は刻苦勉強して現在の地位を築き上げにセルフメイド・マンの典型的な男だった。この型はディケンズの小説化にはしばしば登場する。例えば「辛い世」のバウンダビー、未完の小説「エドウィン・ドルードの謎」のジャスパー等である。彼らは社会的地位も低くはなく、経済的にも苦しいわけではない。むしろ豊かな部類に入る。ただ、過去の自分の地位からはい上がるため、そして、現在の自分の地位を守るために努力を重ね、自分に厳しく、他にはさらに厳しく目を向けざるを得なかった。そして、その間に様々なものを失ってしまった人々である。失ったもののうち最も大きなものは、他に対する共感と想像力であろう。要するに、人間らしい暖かい心といえようか。後の作品では、セルフメイド・マンのそのような側面がより掘り下げられ、彼らの人格の荒廃の悲惨さを示すようになるが、「クリスマス・キャロル」においては、むしろ滑稽味をもって描かれている。だからといって作者は主人公を滑稽な人間、楽しい隣人として描いているわけではない。滑稽さで現実のスクルージの醜さを隠しているが、根は他のセルフメイド・マンと同じと考えてよい。スクルージは、「オリバー・トウィスト」のビル・サイクスやフェイギンの様な犯罪者ではない。彼はむしろ、道徳的な意味における悪人なのだ。

さて、ここでマーレイの幽霊が登場するまでのスクルージの心理を考えてみよう。ノッカーがマーレイの顔に見えた時から、スクルージの心は動揺しはじめる。何かが起るのではないかと、という漠然とした不安に、室内を綿密に調べさえる。濃霧と雷という自然現象と、マーレイにおびえる心が、マーレイを呼び寄せたといえるかもしれない。そして甥と、

募金を求めに来た世話人達とのやりとりも、彼の心に何らかの影響を与えたに違いない。

さきに述べたように、マーレイは生前の無慈悲な心のために、死後も後悔の苦しみを伴って終りのない旅をしている。そして、スクルージが自分と同じ運命をたどらぬように忠告するために彼のもとにやって来たのだった。現在のままのスクルージでは、マーレイと同様になるのは明らかである。その現在を変え、そして未来を変える手段として、作者は過去を選んでいる。現在の自分を否定するために過去を捨て去るのではなくて、過去の自分に立ち戻っているのだ。このことは注目しておく必要がある。この物語はスクルージの再生の物語である、と言ったが、この再生は全く違うものに生れ変わるのではなくて、本来の自分、生まれた時の自分に戻る、という意味である。そう考えると、現在のスクルージを道徳的悪人とする、生まれた時の彼は善人である。この善人から悪人への移行の原因は、本人の意志よりもそうせざるを得なかった状況にあるだろう。その状況とは社会の営み自体に他ならない。

第一の幽霊は過去のクリスマスの幽霊で、スクルージを幼年時代、青年時代へと導く。そこでスクルージが見た自分は、甥や、現在彼の周囲にいる人々と同じように、クリスマスに胸を躍らせる貧しい少年だった。彼は自分の過去に感動し、有頂天になってそれと一体化する。そして、それと同時に、現在の自分を疑問に思う気持が芽生えてくる。彼がこの過去にもう少しとどまりたいと願っても、それはかなえられず、幽霊はスクルージを彼と貧しい婚約者との別れの場面につれて行く。この時のスクルージは少年時代の彼とは異なり、「利得」だけを信じる男になっていた。現在のスクルージの原型である。これから先は現在の自分まで一直線に進むばかりだ。何も頼るものがない少年が、次第に金の力を認識していったとしても不思議はない。しかし、婚約者が言うには、スクルージは、それを人世の中で最も大切なものにしてしまったのだった。

これが二人の別れの原因だった。若いスクルージは別れの悲しみよりも、持参金のない妻を持たずにすむことで、むしろ、ほっとしていた。ここでスクルージはもう見たくない、立ち去りたいと幽霊に訴える。これは、それまでに見せられた過去によって彼の内面が全く変わってしまったことを示している。最後に第一の幽霊が、貧しい婚約者の貧しいけれど幸福な家庭生活を示した時、スクルージは、あり得たかもしれない自分の平和な生活を目のあたりにして涙する。この涙はまさに後悔の涙、現在の自分を否定する涙であろう。マーレイの目的は、第一の幽霊の出現によって達せられている。過去だけで現在のスクルージを変え得ている。それも最も純粋な幼年期の彼自身を示しただけで。幼年期のスクルージとて、必ずしもいつも幸福であったとはいえない。父親からは愛されていなかったようだし、母親は全く登場しない。貧しく孤独で、自分で生きていかなければならないタイプの少年だった。けれども、この時期、彼は疑うことを知らぬ無垢な子供だったのだ。そして、現在のスクルージを変えたのは、そういう過去の自分だった。

ディケンズの小説には、無垢な子供達が数多く登場する。ある者は、「骨董店」のネルや「オリバー・トウィスト」のディックのように、現実に打ち負かされて清らかなままに死に、またある者は「大いなる遺産」のピップのように現実に立ち向うために幼年時代の心を捨てていく。本人が死んでしまっても、純真な心を捨ててしまっても、その心が大人の中にそのままの形で残らないのは同じである。純真無垢な心は人世のごく一時期にしか存在しないので、私達にはそれが周囲をも浄化する神聖なものに見えるのだろうか。子供のような純真な心を持った大人というのも、ディケンズの小説には登場するが、彼らが読者に与える印象は、無垢な人、神聖なる人というよりは、むしろ愚か者といったものではないだろうか。作者がいかに愛情を込めて書こうとも、彼らの実在感希薄である。作者自身、完全に子供のような大人など存在するはずがない

のを知っており、それ故、子供の純粹さにひかれていたのかもしれない。

死んでしまった子供達は別にしても、生き残った子供達の多くはどんな運命をたどることになるのだろうか。ディケンズは、しばしば貧窮のために幼年時代をあまりにも早く奪われた子供達を描いている。まだ親鳥の翼の下にいるべき雛ともいえる年頃の子供達が、世間に押し出され、自らの人世を切り開かなければならないことに、彼は深い同情と憐みを示している。彼自身もまさにそうであった。彼が学業を中断して、ウォレン靴墨工場に務めたのは12歳の時だった。そして、その後父ジョンが負債のため、マーシャルシー監獄に家族と共に入ることになる。ディケンズはたった一人で世間に立ち向かわなければならなかった。貧困も監獄も彼にとって想像上のもではなかったし、世間に放り出される子供の悲しみも、苦しみもまた同じだった。スクルージもまた、そういう子供の一人だった。早く独り立ちしなければならなかった子供達の中には、犯罪に走る者、心をねじ曲げて生きる者などもいた。いずれも幼い我が身を守る方便なのだろう。

第二の幽霊はスクルージに現在を見せるが、最後に自らの衣にしがみつく男女の子供を指し示す。

They were a boy and girl. Yellow, meagre, ragged, scowling, wolfish; but prostrate, too, in their humility. Where graceful youth should have filled their features out, and touched them with its freshest tints, a stale and shrivelled hand, like that of age, had pinched, and twisted them, and pulled them into shreds. Where angles might have sat enthroned, devils lurked; and glared out menacing. No change, no degradation, no perversion of humanity, in any grade, through all the mysteries of wonderful creation, has monsters half so horrible and dread.^⑥

ここには子供達を憐む気持よりは、嫌悪の感情があるばかりだ。ここにいるのは汚れなき子供達ではない。人間としての尊厳を全く失った怪

物があるのだ。美しく無垢であってほしい子供達の、これが現実の姿だった。男の子の名は「Ignorance」、女の子の名は「Want」だった。男の子の額には「Doom」という字が刻まれている。幽霊は、特にこの男の子に注意せよ、と言うが、これは、現実の醜さ、悲惨さの原因を無知に求めていることになろう。ただ、それは個人の無知なのだろうか、それとも社会全体の無知なのか？

物語の中ではスクルージの過去・現在・未来をこの三語、「無知」、「欠乏」そして「運命」又は「最後の審判」で表わすことができよう。実現されていないのは最後の一語ばかりである。

クリスマスの朝、目覚めたスクルージは、「まだ間に合った」ことを知り、今まで考えもしなかったような善い行ないを数々する。間に合ったのは、クリスマスに、ではなくて、自分の未来に、である。まだ現在にあって、未来を変えることができることに感謝しているのだ。たった一晩で、それまでは目に触れなかった沢山のものを見、後悔し、再び善人として生き返っている。言葉を変えると、悪人としてのスクルージは一度死んでいるのだから、その後の彼とは全く関係のない人間であると考えてよいだろう。ただ、彼の改心は拒否できたにもかかわらず、自分の過去を受け入れた時に始まっていることは注意しておかなければならない。幽霊たちは、それぞれの現実を見せただけで、それらを受け入れたのは彼自身なのだから。改心前のスクルージが苛酷な人間に描かれていればいるほど、そういう人間にも救いを与えている作者は、人間を肯定する考えを持っていたといえよう。

改心後のスクルージは *deus ex machina* として現実の全ての問題を、彼の心がけだけで解決していく。その力はわずかに彼の周囲だけにしか及ばないが、彼自身も、周囲の人々も皆、前よりは幸福になれたのだ。人間が一人一人みな、自己主義を捨てれば、その周囲は社会全体に広がり、世の中が変っていく。この楽天的な社会観は、この物語の結末にふ

さわしいが、「Ignorance」と「Want」が示した現実の社会の矛盾の解決にはないことを作者自身よく理解していたようだ。なぜなら、この問題は以後もしばしば彼の小説に現れ、作者の楽天主義が徐々に変化していくのが読みとれるからだ。おとぎ話仕立てで、喜びと感謝にあふれたこの物語に、人間の不幸の原因として「Ignorance」と「Want」を挿入することにより、この物語の示す現実がより深くなっているのではないだろうか。

— Notes —

- ① *The Christmas Books Volume 1. A Christmas Carol* ; Charles Dickens, The Penguin English Library p46.
- ② *The life of Charles Dickens Volume 1.*; John Forster, Everyman's Library 781. p283.
- ③ *Dickens : The Critical Heritage* ; Edited by Philip Collins, Routledge & Kegan Paul Limited 1971. p147~p148.
- ④ 同上 p148~p149.
- ⑤ *The Life of Charles Dickens* p781.
- ⑥ *Selected Short Fiction* ; Charles Dickens, Penguin English Library p128.
- ⑦ *The Christmas Books Volume 1. A Christmas Carol* ; p49.
- ⑧ 同上 p108.